



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.232
2023.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第49回 ● 『日本先史土器図譜』を紐解く！

山内清男の加曾利B式研究は、「細片」出土層位を端緒とするが故に層位標本による「細別」概念の有効性には課題を残しつつも、**学史的資料を地点別層位別に分析した上で、装飾と形態の「全貌」を知り得る新たな標本を選定する手続きが「細別」編年の深化を導くが、その原点は2「細別」編年である。**やがて『日本先史土器図譜』(初版・ガリ版袋入は略、以降『図譜』と略)の3「細別」編年へと進展する過程で、**加曾利B式制定時の層位標本は改めて不問に付される。**学史的な「細別」研究の手続きを逐一咀嚼せずに『図譜』の3「細別」編年からの中途速読学習に従うならば、不幸にも未掲載「細別」実態への手懸りすら見失う。こうして**2「細別」編年から3「細別」編年への進展により、加曾利B式「細別」編年を構成する形態学的変遷の筋金が見事に導出されるが、同時にその変遷途中に「加曾利B1-2式」制定の意義が見出されるのであり、後論する。**

早速『図譜』を紐解くならば、「**第一輯**」(再版・合冊版では「**第I輯**」、以下同様で略)から順に喫緊の研究課題を導出した上で「**土器型式**」と「**細別**」が解説される。「**第一輯**」の「**十王台式**」と「**野沢式**」は本連載第46回で触れた東京考古学会「**弥生式土器聚成図録**」の「**様式論**」への「**細別**」と東北地方への分布拡大を促す認識等の徹底批判である。「**第二輯**」の「**関山式**」は大山史前学研究所による「**連田式**」混同拡大への「**細別**」実態からの批判、及び関東地方の「**多少の地方差**」(ゴチック体は引用者、以下略)とその背景となる中部地方や東北地方との関係、「**諸磯式**」は「**細別**」の優先権批判、及び**武蔵相模**に対する北関東の地方差に注意を向け、「**新型式の設定**」を指針する等、速読厳禁である。

「**第一輯**」と「**第二輯**」に観る「**土器型式**」制定に至る研究史批判、そして「**細別**」の「**地方差**」実態に対する「**新型式の設定**」指針の二者を確認するならば、「**第三輯**」の「**加曾利B式**」(再版・合冊版では「**第Ⅲ輯 加曾利B式(古い部分)**」)でもこの二者の立場は継承される。即ち、加曾利B式研究史批判は自らの「**当時の型式制定は不確実**」と吐露することにより大方が問題としたい制

定時層位資料を不問に付したのである。更に「**加曾利B式の細別については、(中略)未だに明快に指示し得ないで居る。**」と**型式学上の問題点**を示した上で、**2「細別」編年以後の層位別の到達点を「今仮に古い部分、中位の部分、新しい部分の三つに分けることとしよう。」**と仮設する。仮設故に「**細別**」に変動は心得ており、昭和14年の初版・ガリ版袋入では「**第三輯**」を「**加曾利B式**」、「**第四輯**」を「**加曾利B式(続)**」とし、「**野沢式**」や「**諸磯式**」と同様に「**土器型式**」の単位に「**細別**」名を附すことは避けている。この方針は『図譜』全体に貫かれており、それ故に昭和42年の再版・合冊版が「**第Ⅲ輯 加曾利B式(古い部分)**」(新旧の2「**細別**」時は「**堀之内式**」と同様に「**加曾利B式(旧いもの)**」)と仮称し、古・中・新の3「**細別**」では新たに「**加曾利B式(古い部分)**」と記載、「**第Ⅳ輯 加曾利B式(中位の古さ)**」と変更したのは、後述する様に「**部分**」や「**古さ**」夫々の**相当標本にも更なる型式学的「細別」に通じる変化を見出しているからである。**

さて、この『図譜』の加曾利B式には今日でも学ぶべき研究的方法的課題、即ち、**個別変化が構造的な変化へと連動する型式学的筋金と、層位に現れる新旧変遷との相互関係について吐露される等、速読厳禁である。**具体的には**第一の課題**として「**加曾利B式(古い部分)**」から「**加曾利B式(中位の古さ)**」への**層位的な「土器型式」変遷を検証し得る型式学的筋金の導出**があり、それを受けて**第二の課題**は「**古い部分**」や「**中位の古さ**」の夫々に**潜む個別形態学的変化と、型式学的筋金による「土器型式」の変遷との間の次元の異なる変動の意義を究明することである。**

そこで「**第四輯**」冒頭に刻印された「**加曾利B式の中位の古さ及び新しい部分に於いては器形も装飾も段々変わり、堀之内式からは遠く、安行式に似たものになって来る。**」との重要な要諦に従えば、「**第七輯**」の「**安行式土器(前半)**」の図版62(第52図参照)は「**安行1式の深鉢形の一範型**」と指示する**檜橋貝塚の大波状口縁深鉢**であるが、**器種別に制定する「範型」概念を用いること**で「**加曾利B式(新しい部分)**」の第50図が「**安**

行式に似たもの」の変遷過程に位置付けられるだけで無く、後述する「**加曾利B式(中位の古さ)**」も又同様に**大波状口縁深鉢**を標準としており、「**加曾利B式(中位の古さ)**」から「**安行1式**」への変遷は「**体部で分立する大波状口縁深鉢**」を「**範型**」とする「**似たもの**」シーケンスの導出となり、**層位と「範型」による型式学が同時に適用される。**

戻って「**第三輯**」ではどうか。やはり具体的な解説の冒頭には「**第四輯**」冒頭と対を成して「**加曾利B式の古い部分は堀之内新型式に近似し、**」と**同定の要諦が刻印される。**従って「**第四輯**」に倣うと「**加曾利B式(古い部分)**」の範疇は「**小突起付(小波状口縁)深鉢**」を「**範型**」とする「**似たもの**」シーケンスが指定され、他方で「**加曾利B式(中位の古さ)**」への変遷は「**体部で分立する大波状口縁深鉢**」の**出現・定着という非連続を窺う変動**となり、両者には**中間の層位が見え隠りする。**

畢竟、『図譜』の加曾利B式は「**小突起付(小波状口縁)深鉢**」から「**体部で分立する大波状口縁深鉢**」へと分断ある2「**細別**」変遷が指定され、次に後者は層位を異にする「**似たもの**」シーケンスを得て3「**細別**」され、略同時に「**曾谷式**」→「**安行1式**」への変遷も確立する。しかし、学史的な大森貝塚の「**大森式**」突起(沼田頼輔提唱)や「**大森式菱形土器**」(杉山寿栄男提唱)と山内清男の加曾利B式との形態学的連絡・交渉は近年まで残され(鈴木正博(1986)「**大森貝塚の加曾利B式土器—資料補遺編—**」『**史誌**」第25号)、敗戦後には再びアンチ山内清男の旗印の如く「**大森式**」が蘇る(ジェラード・グロートほか

(1952)「**姥山貝塚**」)。反動形成としての「**大森式**」受容は以後も芹沢長介等に継承されるが、省略に従う。連載第47回の山内清男命名「**大森式**」とは**文様帯が異なるからである。**



▲第52図:『図譜』「第七輯」の図版62(「安行式土器(前半)」の檜橋貝塚の大波状口縁深鉢)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 『日本先史土器図譜』を紐解く!(第49回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト (第225回) 滝沢勇馬 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第1回) 工業善通 …2	■考古学者の書棚 『ノンデザイナーズ・デザインブック』 平石冬馬 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第1回)

工楽 善通

1939年1月に私は兵庫県高砂市で生まれた。高校を卒業するまで、戦中、戦後をそこで暮らした。1945年に入って高砂の上空にもB29機が襲来するようになり、空襲警報のサイレンが響き、15～20km離れた姫路や明石の夜空が、爆弾投下によって真っ赤に染まる遠景が、加古川河口に架かる大橋上から間近に見え、園児であった私の脳裏にはっきりと刻み込まれている。

私が高校生になった頃から地元神戸新聞紙上に、姫路沖に点在する家島群島での考古学者による発掘調査状況や、姫路市内の千代田遺跡の発掘速報が、日ごとに掲載されて、それらを見て一気に考古学の道へ進みたいと思うようになった。特に後者の記事には、明治大学から杉原荘介教授が来て発掘しているという記事に興味を唆った。その頃関西でも瀬戸内海に面した鷺羽山遺跡で旧石器が存在するらしいというニュースが発表されて、注目されるようになってきた。そこで私は弥生時代と旧石器時代存否に関する研究を進めたいと思い、1958年春に明治大学へ入った。史学地理学科であったが、考古学専攻生は13名で、うち2人は女子であった。当時はまだ2部制で、夜間生は4名だったと思う。入学後初の夏休みは楽しみであった。はじめて学割を使って帰省の途中に大廻りして島崎藤村の「千曲川旅情の歌」でうたわれた小諸の古城をぜひ訪ねたいと計画した。しかしわが実家は商店を経営していたので、盆暮れは大忙しで店を手伝わなければならない、限られた日程であったが足を延ばすことにした。はじめての国鉄の学割周遊券を利用しての旅でわくわくした。梅雨の明けたカラッと晴れた日の朝新宿駅を発って、午後小諸城を見学した。苔むした古城の石垣は、カンカン照りの夏日にはちょっと不似合いであったが、石垣に染み入る蝉しぐれは私を癒してくれた。

1969年3月に明大大学院を修了し、その春から奈良国立文化財研究所に就職することとなった。それは前年の68年に、研究所に「平城宮跡発掘調査部」が新設され、一挙に19名が採用されたのである。この半数以上はとくに大卒生となっていた人たちで、横山浩一、佐原真、藤井功も含まれ、学校教員からの転職者も居た。その数年前に、平城宮跡の推定西南隅に近鉄電車K.K.が車庫を建設する計画を発表したことから、同宮跡の保存運動が全国的に広まり、国会でも取り上げられるようになって、池田勇人内閣が宮跡の全域を国費買上げすることを決定した。それに伴って、宮跡の範囲確定を早急にやらねばならなくなった為、新組織立ち上げの人員増となったのである。

入所して3年目の1967年11月25・26日の土・日曜日に、信州飯田市の下伊那教育会館で長野県考古学会の第6回大会が開催された。本大会は「弥生文化の東漸とその展開一特に中部高地を中心として一」というシンポジウムで

あった。我々奈文研の新生は佐原真さんの呼びかけで、信州出身の横田義章、前年に奈文研に来たばかりの阿部義平、そして私の4名が1泊2日で参加しようということになった。私は大学で主に西日本の弥生文化を勉強し、その土器編年について卒業論文を書いた。また大学院ではそれをもとに東日本の弥生文化に関して、その成果をまとめた。今回の信州での大会テーマが弥生文化の東漸を主題にしたものであるため、私は参加したい気持ちでいっぱいであったが、当時の平城宮跡の発掘調査は土曜日も午後5時迄出勤であったので、自費参加とはいえ果して4名そろって休暇が取れるか否か心配であったが、何とかOKが出た。私は2度目の信州行きであり、初めて外部の多くの研究者の方々と交流の場もてること、大いに期待がふくらんだ。シンポジウム当日には地元信州から大沢和夫会長ほか神村透、桐原健、樋口昇一、宮沢恒之、佐藤甞信、今村善興、笹沢浩一氏など大勢の参加であった。東海地方からは向坂鋼二、外山和夫、紅村弘氏、東京方面からは、永峯光一、金井良一氏など多彩で総勢70名ほどの参加であったろうか。

大会初日の午後は「中部高地への弥生文化の波及」が主題で、私はもっぱら本題へ出席するのが目的でこの大会へ来たようなものである。地元研究者の発表を色々聞き、また、永峯氏司会のもとでの質疑応答の場では、これまでの報告書やレポートでは記述されていない事実などが当事者から報告されて、こんな研究集会は初めての経験で、得るところ大であった。会場には同窓の外山氏も参加しており、久しぶりの再会で、東海地方の条痕文土器と大洞系土器の関係について解説してもらったことは鮮明に覚えている。佐原さんに紹介してもらい、向坂さんとお話できたのもこの時がはじめてである。

翌日の報告、討論はほとんど覚えていないが、帰路の車中から飯田市郊外の農園のリンゴの木々に、真赤な実がいっぱいぶら下がっているのを、生まれて初めて見た感動はすばらしいものであった。その後の訪問で、飯田駅前にはリンゴの並木通りがあるのを知り、沢山の写真を撮り、奈良で自慢げに人に見せたりした。

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈良研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本曜久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 225

館町龍見寺裏山地区遺跡 ～東京都八王子市館町～ 滝沢 勇馬

今回、私が紹介する遺跡は、東京都八王子市に所在する館町龍見寺裏山地区遺跡(たてまちりゅうけんじょうらやまちくいせき)である。

八王子市は東京都の南西端に位置し、北から西は関東山地と加住丘陵、南は多摩丘陵といった山地や丘陵に囲まれており、市内を東流する浅川の小河川が丘陵を浸食し、小支谷や崖が形成され、起伏に富んだ地形を呈する。館町龍見寺裏山地区遺跡は浅川の支流である湯殿川の源流に近い多摩丘陵北西端に位置し、複数の小支丘や支谷が入り組む丘陵の尾根上に立地する。遺跡の範囲内には遺跡名の由来となった曹洞宗龍見寺が所在し、過去の試掘調査では、寺院の裏手の丘陵を上がった平坦部から、平安時代末期のものと思われる銅製経筒を伴う経塚が発見されている。館町龍見寺裏山地区遺跡の本発掘調査は平成19年(2007)の1次調査と、平成27～29年(2015～2017)の2次調査と2回実施されているが、今回は2次調査の内容について紹介していきたい。

館町龍見寺裏山地区遺跡2次調査は、一般国道20号(八王子南バイパス)の建設事業に伴う発掘調査で、丘陵の尾根上から斜面、谷部にかけて面積にして15,376㎡の範囲が調査された。調査では縄文時代から近世にかけての遺物・遺構が確認されている。縄文時代の遺構としては、中期初頭～前半の竪穴建物跡をはじめ集石、土坑、焼土跡、ピットが確認されている。また弥生時代～古代にかけては土坑、中世～近世は土坑、焼土跡、溝、塚がそれぞれ確認された。その中で遺構として最も多いのは縄文時代の土坑で、丘陵の尾根上から谷部にかけて103基が確認され、そのほとんどが狩猟用の陥し穴(おとしあな)であった。

館町龍見寺裏山地区遺跡から湯殿川を挟んだ東側には、館町遺跡(たてまちいせき)が所在する。館町遺跡の発掘調査では、縄文時代の陥し穴土坑が群在していることが明らかになっており、陥し穴を利用した狩猟方法の研究において重要な事例となっている。そのため、館町遺跡に隣接する館町龍見寺裏山地区遺跡においても、縄文時代の陥し穴土坑が多数検出されることが想定された。検出された陥し穴土坑は長楕円形や円形、溝形など複数の平面形

態が確認された。また、可能な限り土坑の截割りを行い、穴に落ちた獲物の動きを封じるための「逆茂木」とみられる底部施設の観察を行っている。底部施設の形態はその多くが底面に杭痕が確認できるもので、直接底面に杭を打ち込んでいるものや、底面を掘り込みその中に杭を複数本埋設したものがみられた。また、検出された陥し穴土坑の中には、土坑の上半部と下半部がズレたり歪んだりしているものも確認された。それは陥し穴土坑が使用されなくなり埋没した後、地層がズレたとみられる痕跡であった。陥し穴土坑にみられた地層のズレは、そのほとんどが斜面向下に向かってズレていることが確認された。このことから調査区一帯では、陥し穴土坑の埋没後に地震などの自然災害により何度か地盤の変化があったことが明らかとなった。

私は大学2年生の夏、発掘作業員のアルバイトとして館町龍見寺裏山地区遺跡の2次調査に携わった。私にとっては初めての発掘調査であり、とても思い出深い現場である。調査に参加した期間は平成28～29年の約1年、大学の長期休暇はほぼ毎日現場に向かい、学期中も授業の合間を縫って現場に行った。まず、印象に残っているのは、現場事務所から調査区までの道のりである。遺跡は丘陵の尾根上にあるのに対し現場事務所はその麓にあったため、毎朝少々急な坂道を10分ほど登って尾根上の調査区まで行き、最後に坂をゆっくり上がってくる調査員の到着を待ち、一息ついてから作業を開始した。高いところで標高が180mほどあった調査区周辺は見晴らしが良く、西は高尾山をはじめとした関東山地の山々、東は多摩丘陵の山並みが一望できた。遺跡でみられる遺構の大部分を占める縄文時代の陥し穴土坑は、尾根上の平坦部だけでなく谷部へと向かう斜面上にも群在していた。当時学生の私は経験がないため、斜面上に測量のためのレベルを据えるだけでも一苦勞であったことをよく覚えている。調査終了後は整理事業にも携わり、大学院を修了するまで作業に従事した。

先述したように、館町龍見寺裏山地区遺跡で最も多く確認された遺構は陥し穴土坑であった。そのため発掘調査では、陥し穴土坑に主眼を置いた調査方法が採られた。特に、截割りによる陥し穴土坑の底部施設観察は細部に至り、断面をスライスするような方法で数センチごとに杭痕を確認し、その都度図化による記録を行った。こうした陥し穴土坑に特化した調査方法は、館町龍見寺裏山地区遺跡の東約1kmの丘陵上に位置する日南田遺跡(ひなたいせき)の発掘調査(平成29～令和2年)でも採用された。両遺跡の調査は、陥し穴土坑の構造を詳細に記録し、縄文時代の狩猟方法や周辺地域における生業形態を研究するうえで重要な事例であると言えるだろう。

館町龍見寺裏山地区遺跡での調査経験は、私が学生時代に縄文時代の陥し穴狩猟研究に取り組むきっかけとなった。そして、埋蔵文化財調査に携わる現在の自分を形作ったと言えるだろう。令和4年1月には調査報告書が刊行された。報告書のページをめくると当時の思い出が甦る。現在は東京を離れ、福島県いわき市で調査員として埋蔵文化財調査に携わっている。調査や研究で行き詰まった時は、館町龍見寺裏山地区遺跡での経験を思い出し、初心にかえて埋蔵文化財調査・研究に向き合っていきたいと思う。

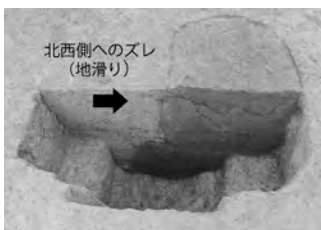
参考文献:

東京都埋蔵文化財センター 2022「館町龍見寺裏山地区遺跡Ⅱ・日南田遺跡Ⅳ」東京都埋蔵文化財センター調査報告 第366集

* 次回のマイ・フェイバレット・サイトは両角太一さんです。



▲館町龍見寺裏山地区遺跡とその周辺の様子



▲陥し穴土坑SK118 土層断面



▲陥し穴土坑SK118 底部施設土層断面

考 古学者の書棚

「ノンデザイナーズ・デザインブック [第4版]」

ロビン・ウィリアムズ 著・吉川典秀 訳・小原司、米谷テツヤ [日本語版解説] / 株式会社マイナビ出版(2022) —— 平石 冬馬

1. はじめに

本書は、デザインを学んでいない人が、やむなくデザインをする必要に迫られたときに活躍する本である。デザインは価値ある目的を実現させる計画、実現を含むプロセスである。プロセス全体は人間の思考プロセスや業務プロセスに近い。また最終的な実現に注目すれば、1つの情報技術と呼んでも差し支えないだろう。ともすれば、デザイン自体は雲をつかむようなもので、門外漢の筆者にとっては理解が難しい。本書はこのようなデザインとほど遠い人にとって良書となる。なぜならば、本書はデザインそのものではなく、デザインをするために必要な4つの原則に焦点を合わせた内容だからである。また、デザインはポスター等を作成するという行為以外にも、思考プロセスや業務プロセスにも応用できる。以上の理由から本書を紹介したいと考えたのである。

2. デザインの基本原則

デザインの基本原則は、「コントラスト」・「反復」・「整列」・「近接」である。コントラストは、ページ上の要素同士を均一にすることを避け、要素の階層化を行うことである。この仕組みによって読み手の視覚を誘導させることができる。この要素というものは書体、色、サイズ、線の太さ、形、空間等である。コントラストは読み手に読む気を起させる働きがある点で重要だが、もう1つは相手に情報を明確に伝える効果があることも重要である。反復は、デザインの視覚要素を作品全体の中で繰り返し使用することを指す。この反復はデザインの組織化を促進し、一体性を強化する。反復させるものとして、色、形、テキスト、位置関係、線の太さ、フォントサイズ、コンセプトが挙げられる。整列は、関連する要素同士に視覚的な関連を与えることを目的としている。この整列によってデザインに洗練さを与えることができる。近接は、互いに関連する情報の組織化を目的としている。複数の情報ユニットを近づけ、1つの視覚的ユニットにする。そして複数の視覚ユニットの配置間隔から情報組織を体系づけ、明確な構造を作り上げる。この情報組織の構造化によって、情報の混乱を減らし、読み手に正しい情報を伝える効果が発揮される。

この4つの要素を1つでも欠くと、内容が理解しづらいデザインになってしまう。その要因は本書で詳細に述べられているため、興味のある方はぜひ手に取って読んでほしい。

3. デザインの実践例 ポスターデザイン

デザインの基本原則は、文化財業界でも応用できる。例えば、資料館展示のポスターの作成である。筆者は日本大学文理学部資料館の学芸員をしている。考古学の企画展に携わった際、考古学特有の敷居の高さや土臭さを刷新するような広報戦略を取りたいと考えた。そのため、展示会の顔でもあるポスターデザインから取り掛かることにした。

当初は徒手空拳で立ち向かった結果、思いどおりのポスターは完成しなかった。しかし、そのときに本書と出会い、納得できるポスターを納期までに完成させたのである。このときの企画展の来館者の内訳をみると、理学系と社会学系の学生や教職員がおおよそ半数の割合を示した。従来、考古学の企画展の来館者は史学科の学生や教員がほとんどで、その他は文学系の学生や教職員がその主体を占めていた。この逆転現象は当資料館にとって驚きの結果となった。もちろん、企画展の内容によって

は同様の結果となる可能性もあり、必ずしもポスターデザインだけがその要因となったとは言えない。しかし、「ポスターをみて自分の大学に資料館があることを知った」と、学生から話を聞いたとき、ポスターデザインがいかに重要であるのかを思い知らされたのである。

なお、当ポスターはターコイズブルー色と白色の二色刷りに、正方形と半円形を反復させたデザインであった。印刷会社のみならず大変なご苦労をかけてしまった。しかし、学生に当資料館を認識させることに成功した背景には、印刷オペレーターの確かな技術と、デザインの基本原則があったものと筆者は受け止めている。そしてこのポスターは、当資料館のHPにて掲載されている。ぜひ、ご参照いただきたい。

●日本大学文理学部資料館HP 過去の展示歴 2022年度

[<https://chs.nihon-u.ac.jp/campus-life/kyogaku-s/museum/>]

日本大学文理学部資料館公式HP ▶



4. デザインの複合的効果 組織の内的変化

今回のポスターデザインをきっかけに、当資料館組織の内的変化を起こすことができた。実のところ、本書を紹介したいと考えた1番の理由は、こちらにある。

私がデザインの基本原則を組織内の広告業務に持ち込むことによって、以下の5つの効果を得ることができた。①感覚的にデザインの善し悪しを決めていた組織に明確な基準を与え、業務遂行の迅速化を促した。②博物館業界内の広告群を分析する方法を発見し、広告の動向を客観的に評価できる組織になった。③広告の動向を客観的に捉えることで、次の動向を予測する手段について議論ができる組織に変わった。④個々人が日常で目にするあらゆるデザインコンセプトを読み取ることができるようになった。⑤これらの新たな習慣によって、デザインに関する新たなアイデアをストックする組織に変わった。なお、②と③については「ポスター・マトリクス」という方法に昇華させ、当資料館にて実践している。

以上の組織の内的変化は、文化財活用を急務とする今日の文化財業界にとって、1つの参考事例になる。その理由は、文化財の広報活動の活性化が業界の盛行と結びつくと考えられるためである。ただし、その下地として、ティール組織のようなフラットな組織をいかにして作り上げるか、という課題も併せて考える必要がある。つまり、上意下達の旧体制から、心理的安全性を確保した新体制に進化させることである。個人の価値観や意見が尊重される組織でなくては、このような組織の内的変化が起きることはない。なお、ティール組織についてはフレデリック・ララー2018『ティール組織』英治出版を参照されたい。

5. おわりに

本書が良書である理由は、デザインの実践的内容に特化している点にある。そしてデザインという行為があらゆるプロセスに通じるため、読み手次第で多方面に応用することができる。当資料館についていえば、組織デザインに成功したといえる。筆者の拙い文では心もとないが、本書が今後多くの読者の手に届くことになれば幸いである。

アルカ通信 No.232

発行日 2023年1月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : <http://www.aruka.co.jp>